

コンケン大学での居候生活 (11)

伊藤信孝

コンケン大学客員教授・工学部

コンケン大学に移籍、受け入れて頂いて4ヶ月になる。相変わらずコロナ禍は収まりを見せず、第2波、第3波と変異したウイルスが猛威を震い、出入国を完全にコントロールして居る国も珍しくは無い。むしろ、そうすべきだとの国民の声を聞いているのかどうか、曖昧な態度で自国民が苦痛にあえいでいると言う国も未だにある。

本報ではアパートの契約も済み、一応の日常生活を取り戻したかの感があるこの時期に、気の付いた事項について書き留めておき、後に続く人のための参考になればとの思いで書いている。後に続くとはどういう意味かは、人それぞれにより理解や受け止め方が違い、その意味は異なるが、大学での教育、研究を通じてアジアや世界に貢献するという大げさに言えばこのようになるが、いずれにしても貢献の志がある人のことを意味すると理解頂ければそれで十分と考える。

12年も住み慣れたチェンマイ大学との比較が、つい出てくるのは致し方無いことである。したがってチェンマイでのゲストハウスでの状況を概略説明し、コンケンでの状況に話しを移す。

チェンマイ大学でのゲストハウスでの生活

キャンパスの工学部内に位置し、基本的にシャワー、トイレ、キッチン、テレビ、小型冷蔵庫、保温機能付き湯沸かし器、インターネット、ダブルベッド、衣類格納戸棚、食卓、ソファ、食卓机が装備されている。広さは一つの家族が生活できる事を基本としているから70~80平米は有ろうか、とにかく広い。ベッドルームと書斎、居間(リビングルーム)に分かれており、1週間に一度ハウス・キーパーがベッド・メーカーと部屋の清掃をしてくれる。特に清掃を希望する場合はその旨、ドアのノブに掛札(タイ語と英語で併記)をしておけば良い。これだけの対応を受けて、家賃は特別の配慮もあって無料であった。洗濯は2階に共通で利用できる電気洗濯機が用意され、適宜いつでも利用できるようになっていた。また、常時冷たい飲料水が飲めるよう電気浄水器が設置されていた。

コンケン大学でのアパート暮らし

ところでコンケン大学ではどうであろうかとなると、殆ど差は無く、あいにく筆者が移籍するときは大学の宿舎が改築中ということでキャンパス外のアパートをという対応になった。比較して、どちらがどうだと言うつもりは無いが、冒頭に示したように後に続く人のために参考として情報を提供するという趣旨から記述しておく。最初はひとまず1、2ヶ月ほど仮住まいして、新築中の民間アパートにその後引っ越すという予定であったが、結局最初に投宿したアパートに続けて居座ることで年間契約とになった。基本的に大学がアパートの家賃はカバーして頂ける契約になっていたので心配の余地はなかった。給料に

相当する毎月の手当とアパートから大学までの交通費が筆者に頂ける内容の契約である。ところでアパートとして契約し、とどまることになった建物は、本来はホテルであり、今もホテルとしてその機能を果たしている。むしろ筆者のようにアパートとして年間契約をする客の方がマイナリティと言える。部屋の内部は少し大型の冷蔵庫と衣類、その他の調度品の格納戸棚、テレビ、バストイレ、ダブルベッド、書斎机、ワイファイ、と言ったところまでが備えられている。もちろん本来が2, 3日から長くても1週間、あるいは1ヶ月程度の正規の料金で宿泊する客が殆どであるから、長期の滞在を念頭に置いた筆者の場合とは根本的に異なる。長期の滞在の場合でも1週間に1回、バストイレ、ゴミの搬出、部屋の清掃、ベッド・メイキング、タオルの交換などはサービスに入っている。長期の滞在となると毎日の食事、洗濯などが自由にできる必要が生じる。外食ばかりでも構わないが、口汚しに小物を調理して食したり、残った食料を冷蔵庫に蓄えて置く必要がある。また適宜取り出して電子レンジで温め、食する必要も出てくる。飲み物もコーヒーばかりでは無い。たまには日本茶も飲んでみたい、と言う事になる。あらかた生活が落ち着くと、更なる段階に入る。生活が落ち着くと、何処に何があるか、スムーズに記憶し出し、速く対応が出来る状態を言う。引っ越して間が無いと、何処にしまい込んだか探すのに時間がかかる。こうした事へのアクセスに、如何に速く対応できるかによって、生活が落ち着いたかどうかの判断の尺度としている。また引っ越して間が無い間は言われるがままに、Grab (Grab) ・タクシーを利用してしたが、それはそれで勉強になったが、たまには宿舎の周りがあるアパートの周辺を散策して見たくなる。何処にどの様な店があるのか、何処に行けば所定の品が手に入るのかなどの知識を得るにも必要なことであり、また気分転換や歩くことで健康管理維持にも役立つ。タクシーでの通勤も最初は地理が分からず、支持された形での対応を続けていたが、道中に車窓を見ていると、どう考えてみても同じような建物を目にする事が多く、試しに休日を利用して歩いてみたら、アパートから大学野オフィスまでは意外と近距離で、歩いてみてもそれほど遠くない距離である事が判明し、健康管理を兼ねて歩くことにして居る。体の調子もすこぶる快調に感じて居る。その評価の尺度は、これまで食事をして体も動かすことが少ないので体重の増加、体の重みが敏感に感じられたが、歩き始めてから多めに食べても体重が増えないことが分かった。その分体調が良いことが直接感じられるようになった。そこで新たな調度品をリストアップし、入手することにした。電気釜も12年もの使用に耐えてきたこともあり、新調したが価格は驚くほどの安さであった。すなわち600パーツ程であったからである。もちろん高価なものもあるがこの価格は日本円で2000円程度であるからである。もちろん入手したのは名の知れた日本製であった。米の炊飯機能と蒸し器としての機能を念頭に置いた購入である。タイ肉まんのサラパオを蒸して食するのによく利用する。米の炊飯は後の水洗がやかいであるため、あまりして居ない。もっぱら蒸し器としての利用が主といえる。また冷蔵庫に蓄えた食材を加熱して食するために電子レンジも購入した。価格は1700パーツ(日本円で5000円余)である。重宝している。他にはチェンマイ当時から使用してい

るトースタがあるが、コーヒーを呑むときのために湯沸かし器（保温機能は無し）を入手したが300パーツ（日本円で約1000円）である。これで一応の衣食住をまかなえる体制となった。食事には肉類のみならず生鮮野菜を取る事も必要と言うことでレタス、キャベツ、白菜、ニンジン、キュウリ、大根なども冷蔵庫に保管しておかねばならない。余り多く購入すると食べきれず、棄てる事にもなる。長期の保存となると腐るので、一生懸命食する必要に迫られる事もある。ここで購入した日本製品について若干の不平と希望を記述しておく。電気炊飯器であるが、蒸し器として利用しているときに、どの程度暖まったかを調べるために、ふたの取っ手に手をやった途端に、吹き出し口から出る蒸気の熱で手をやけどした。ふたを開けるには取っ手を持たねばならないが、その取っ手の脇に上記の吹き出し口があり、熱い蒸気が手に触れる構造になって居る。よく見ると、タイ語で注意を促す注意書きが張ってあるが、タイ語が読めない筆者にはわからず、やけどを仕掛けた思いがある。日本製品にしてはちょっと・・・と若干驚いた次第である。と言うのも安全に対する対応が少々足りないのではと想ったからである。タイ語がわからず、注意書きが何故そこに張ってあるのか分からなかったとは言え、そうした状況にあっても蒸気が直接手や指に触れない構造としておくのがフェイル・セーフ (Fail safe) であり、この概念が配慮されていない。やかんの蓋も湯が沸くと蓋に開けた穴から蒸気が噴き出す。しかしまっすぐに空けた穴からは蒸気は真上に上がるが、穴に窪みをつけて蒸気を横方向に逃す構造とするとこうした危険は回避できる。注意書きを貼るのみで無く、間違っても安全を優先する設計理念がその製品には反映されていないと筆者は見たが、この問題に企業は果たしてどの様な対応をしてくれるであろうか。あるいは既にその対応をした製品が市場に出回っているかも知れない。この種の対応がやかましく言われたのはPL (Product Liability) 問題が注目された時代である。車の事故に於けるユーザーの運転技術のまずさか、車の製造をし販売する企業の製造責任か、が問われる問題で、現在でもこの種の問題には社会のきびしい目が注がれている。日本の大手自動車企業がアクセルとブレーキに関する所定の機能を精確に制御しているかが、大きな問題となり米国政府に多額の罰金を課せられたことはそれほど記憶に遠くない。

海外に住むと衣食住に加えて自身の健康管理が大切である。簡易に測定できる体温計、血圧計などはその典型的な例である。それら機器の殆どは電子機能で値を表示する。極めて手軽で便利である事は言うまでもない。この便利さが大きな普及、販売実績にも反映していると視ることも出来る。しかしユーザーは購入時にどれほど使用説明書に目を通すであろうか。おそらく目を通さず、早速使ってみると言うのが大方のユーザーの対応かと考える。血圧計は血圧を測定する部分の周りに圧縮空気を送り、まき付けた帯状の布またはそれに類する袋の中に空気が入りポンプで圧力がかかり、血圧を数値で表示する構造になっている。この種の器具の故障は殆どが電池の容量不足にある事を最近発見した。測定準備をして測定を始めるとポンプが作動し、腕に圧力を感じる。しばしするとそれ以上に圧力がかからず、エラー表示となる。このとき気を付け無ければ成らないのは、電池が悪い

と想う人が少ないのではないかと言う事である。作動している以上電池は大丈夫、しかしそれ以上に圧力が上がらずエラー表示になるのは空気を送る管の空気漏れではないかと考えるユーザーが多いのではないか。機械にいくらかでも馴染みのある筆者も上記の様に考えたからである。「動いていれば電池の容量は足りている」と安易(?)に考える、そこで何度か空気を送る管を点検するが、故障や破損は見当たらない。しかしそれ以上に確かめる方法がないので、「多分、原因は送気管の空気漏れであろう」と判断して放棄することになる。新たに新品を購入して同じような事に遭遇し、まだ購入して間が無いのに、何と言う製品なのか」と思い、やおら使用説明書に目をやり、電池の容量不足を試すことになる。そして「電池を交換すると正常に動く。あわてて以前の廃棄した製品はどうしたかと家族に尋ねると、貴方が壊れたと言うから「棄てた」という。こうした無駄を知らず知らずのうちに繰り返して居る事は無いであろうか。言うまでも無くユーザーの責任も有るが、使用説明書に、「優先順位の真っ先に電池の交換をすること」を記述するよう、製造企業サイドにお願いしたい。さもないと電池の1個や2個で対応が済むものが数千円から1万円もする本体全てを新規購入、交換するという対応を知らず知らずのうちにやってしまう事にもなりかねない。なまじっか機械や工学の知識や経験を持っていたが為に簡単な方向に目が行かず、複雑に物事を見る見方がこのような低レベルの対応に陥ることを反省している。電気機器の調子が悪いから見て欲しいと言われ、複雑な回路や内部の部品に集中して見ていたが、これと言って原因が見いだせず長時間を掛けたのちに、プラグをコンセントに差し込んだときの接触が悪くて、いままで点灯しなかったパイロットランプが点灯してプラグの中でねじが緩み、線が緩み接触したりしなかったりして調子が悪かったと言う初歩的なところを見逃していたときと同じであるが、機器本体が数千円から1万円もするのでは、やはり不具合の時の診断の優先順位が使用説明書にはっきりと強調為て記述されている事の重要性を見逃したくない。電気炊飯器の蒸気の噴き出し部についても、注意書きを付けておけば良いという対応で無く、蒸気の噴き出し方向を変えるなり、それなりの遮蔽板を付けるなり、フェイル・セイフの対応を強く願いたいものである。この種の対応は消費者側にあるのでは無く、あくまでも製造物責任が問われる問題である。

最後に、日常生活で最もお世話になる金銭のことについて触れておく。チェンマイからコンケンに移動して1, 2ヶ月は手続きの関係で銀行に口座を新規に開設しても、金は振り込まれていないから、これまでチェンマイで使っていた口座の通帳を使ってそこから必要な額だけ引き出して使っていた。良くみると、引き出す度に15パーセント程が差し引かれていることに気付いた。聞いてみると手数料として引き落とされるという。なぜか分からなかったが、居住地での銀行口座であれば引き落としはなされないと言う。チョット理解しがたい理不尽なサービスである。金額の大小に限らず1度引き出す度にこの額が引き落とされるので、同じ引き落とされるのなら少々高額の引き落としはチェンマイの口座の通帳を用い、少額のものについてはコンケンでの口座通帳を利用するようにすればとの助言を知人から頂いたが、それはそれでもっともだが、手数料を利用の度に引き落とされるの

には、いささか抵抗感と理解に時間がかかった。しかしそうしている間にも手数料は引き出す度に加算されるから、某かの対応をしておかねばならない。もちろんチェンマイでの銀行もコンケンでの銀行も同じ S C B (Siam Commercial Bank) であるが、それでも手数料は取られる。そこでチェンマイでの預金通帳を新しくコンケンで作り直して貰うべく申し出ると、それは可能だがその手続きにまた手数料が要するという。結局2つの預金通帳を新しく作り直すのに46パーツを支払った。自分の金を引き出すのに余分に手数料を払うことには、かつて日本でも異論があった。金を預けて貰って居るのではなく、預かってやっていると言う上から目線が、顧客としての扱いを忘れさせているようである。しかし今更そんなことを言ってもラチはあかない。肅々と従うしか対応は無いのである。それから見れば国のどこに居ようが同じ銀行であれば引き出すときに手数料は要らない日本のケースは当然ではあるが有り難いことである。(余談)



図1 電気炊飯器の外観



図2 蒸気の吹き出し口



図3 血圧計の外観
最高、最低血圧値、
エラー表示部と空気を
圧送する管、血圧測定
部に巻く带状部